

爽涼随想二題



村山正則

生活の中の音

かつてのこの国の生活には「静けさ」というものがあつた。朝、目を覚ます。窓をあける。小鳥が無心に囀っている。新聞配達の人が来たのか、自転車のブレーキの音。しばらくして、「おはよう、ごくろつさま」と隣のオバサンの声。……こうした静かな音の中で一日が始まつた。ひと昔前の生活には貧しい中にも豊かなゆとりがあつた。

今、私の住む瀬戸内海に面したわが町も、かつては静かな町であつた。暮らしの周囲には日常のゆるやかな時間が流れていた。自然の音、生活の音に囲まれ、音そのものに季節感が伴つていて、それが当然のような平穩な社会であつた。

今はどうか。瀬戸大橋という不粹なものが絶景の中に建設されて以来、現代の文明社会、車社会は、余りにも自己本位で、人間の作り出す騒音の中に習慣づけられながら活かされ

ているのが私達の共通の悩みではないか。物売りや廃品回収車にとりつけたスピーカーは殊更に音量をあげ、文字通り騒音を撒き散らす。加えて、事もあらずに空からの威圧的な宣伝飛行。世界広しといえども、こんな騒音を許しているのはこの国だけじゃないのか。

近代的な町作りの形態になって、鳥や虫も生活圏が脅かされて、自然の音が本当に少なくなつた。交通の音だけが目立つこの境。どこから湧いて来るのか銀バエのような暴走車。うるさい……といえはこいつに限つて「表現の自由、権利」がでてくる。

「静けさ」とは基本的人権の一つではないのか。季節の音には行政はもつと敏感であつて欲しい。こんな世相の中でゆとりある生活、「実感の伴つ豊か」といふ行政のうたい文句の空しさはどうだ。

ところで、秋といえば虫の声。わが家の庭でもコオロギが賑やかになつた。個々にはまだ秋の風情が残つていてほゞえましい。最近の子供たちは自然の虫の声をきく場所も失われて気の毒である。当地でも自然博物館で虫の音をきかせている。虫たちもこんな力ゴの中で鳴かされては可哀想ではないか。

今日の生活の中のいらだたしさと、どうしようもない文明のわがままを思つ時、二十一世紀の近代文明の進歩を否定す

るものじゃないが、せめて十九世紀の昔に思い馳せて、人間中心の生態系をとり戻すことを考えたら、と思うことの切なるものがある。

子供の眼

子供はときに真実を教えようとすることがある。園医をしていられる幼稚園に検診に出かけたある日、園長先生が園児たちの絵を見せてくれた。幼児の絵は度々見る機会もあったが、こうしてじっくりと見つめてみると、色んな事を教えられる。

太陽はとかく赤色やオレンジの輝く色彩で描かれている。真夏の焼けつくような太陽は真紅が似合うだろうが、太陽は常に赤紅色と決めることは出来ないだろう。穏やかな昼の太陽は黄金色がふさわしい。日の出は赤というよりもオレンジの色調に近い。夕日はむしる赤がかっていて子供たちは素直に描き分けている。

信号機の色別でも教えられた。信号機の「青」は本来「緑」だったのだ。誰も緑の信号というより「青」と言われるから「青」に見えていた。園児の描く信号機の「青」は「緑」であつた。自然を見る目は、ひよっとすると子供の方が真実に近いのかも知れない。

画用紙一杯にリンゴを描く子は、自分の手掌に乗り切らない。その大きさを感じたままに表現する。ときいたことが

あるが、お母さんの顔、風船を画面一杯に描かれたのを見ると、そんな感情が素直に表現されているのであろうか。大人は子供の真実をみる偉大な感覚に気づかないで、いつまでもわが掌中にある……と思いたがる場所に、大人の反省がなくてはなるまい。

ところで、「みる」という時には色々の表現がある。「見る」、「視る」、「観る」、「診る」、「看る」……夫々に独自の意味をもっているが、鮮やかな色調と力強いタッチで知られ中川一政画伯の写生に於ける眼の鋭さは、果物や花など、見つめられた部分から傷み始めた……と言われるほど迫力があつたそつだ。一方、偉大な画家の中には目に障害のあつた人も多い。モネは白内障、ゴッホは緑内障、ルノアールは近視、レンブラントも近視、モジリアニやグレコは眼球異常を患っていたと言われるが、目に障害があつても偉大な作品を創り出したとするならば、真実を捉えるのは、中川画伯の眼光もさることながら、眼ばかりではないといえる。

みる人の心をとらえる絵画というのは、邪心のない幼児の表現のように「真実」を捉えているところにあるように思える。子供の絵は、ときに真実を教えようとする。「見れども見えず」といわれるが、これは考えてみれば、「絵画」ばかりではなさそつだ。